



Title	映画音楽機能論
Author(s)	張, 雷
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42000
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	張 <small>ちょう</small>	雷 <small>らい</small>
博士の専攻分野の名称	博士 (文学)	
学 位 記 番 号	第 14917 号	
学 位 授 与 年 月 日	平成 11 年 9 月 9 日	
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科 芸術学専攻	
学 位 論 文 名	映画音楽機能論	
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 山口 修	
	(副査) 教 授 根岸 一美 教 授 上倉 庸敬	

論 文 内 容 の 要 旨

芸術の形式としては、映画は他の形式よりもはるかに短い歴史しか有していない。それだけに、芸術学的な考察の対象とされることは近年でこそ顕著になってはいるものの、映画の本質の全容が総合的あるいは理論的に明らかにされているとはまだ言えない。まして、いわば総合芸術としての映画のなかで機能する音楽については、断片的に論じられることはあっても、本論文のように多角的に扱われることはなかった。

本論は、序論「文化としての映画音楽」、第 1 部「音楽が創る映像の時空」、第 2 部「抽象と具象の狭間に位置する音楽」、結論「無限の時空に残る映画音楽」という構成をとり、第 1 部が 3 章、第 2 部が 4 章に分けられている。

人間が創りだした特殊な時空としての映画では、人間の過去・現在・未来の環境がシナリオにもとづいて監督によって表現されており、換言すれば、映画は文化として捉えられることが序論で述べられる。第 1 部、第 1 章「音楽が存在する映画の『環境』」では、実際に映画が上映されるのに要する上映時間と、プロットや場面に応じて表現される叙述時間とを区別したうえで、映画的時間が映画音楽的時間といかに吻合するかという観点から考察が始められる。具体的に『さらば、わが愛 霸王別姫』(中国、1993)『ゴッドファーザー 3』(米、1991)、『黄色い大地』(中国、1984)、『裸の島』(日本、1956)などに即して検証した結果、映画音楽は単に時間のみならず空間をも表現するものであることが述べられる。第 2 章「映画のテーマ音楽」では、テーマ音楽が観客を映画のなかに引き込む手段のひとつとして有效地に機能するのが、楽器や声による音楽的特性によっていることを指摘し、第 3 章「作曲家と監督の思惟の吻合」では、制作現場に存在する問題点を意識したうえで、監督と作曲家の思惟行為が吻合する過程を考察する。

第 2 部、第 4 章「音楽の幻想」では、目に見えない瞑想の世界に属する、いわば抽象的な存在としての音楽がいかに具象的な映像を表現できるかを論じる。主に具体例として『ダンス・ウィズ・ウルブス』(米、1991)を詳細に分析した結果、音楽による叙述が直接に物事を描写するというよりも、むしろ対比的なイメージを音に託す場合の方がかえって効果を挙げることを指摘する。一方では、音楽が映像を直接模倣することもあり得る(第 5 章「音楽による映像模倣」)。また、特殊技法としてのモンタージュが可能にするような、きわめて人為的な時空の構成も効果も挙げる(第 6 章「音楽とモンタージュ」)。こうして、映画音楽は映像の効果を補助するだけでなく、映像機能をさえ帯びるこ

とができるのである（第7章「音楽の映像機能の形成」）。つまり、映像と音楽がさまざまに融合することにより、新しい文化現象が創造されると結論づける。

（分量 本文121頁 400字換算約363枚 付録等44頁）

論文審査の結果の要旨

この論文の最大の特徴は、映画を単に観る側からだけ論じるのではなく、声優・俳優として制作する側にも加わった実体験に裏付けられた「創る」論理への目配りを常に忘れることなく、映画と映画音楽の関係を具体例に基づいて詳細に分析しつつ、一般論に到達しようと努力しているところにある。第二の特徴としては、プロの音楽家（演奏家）としての感性を反映させて、中国、アメリカ、日本の映画における音と無音のあり方を緻密に把握分析していることが挙げられる。ただし、いくつかの短所も指摘せざるを得ない。第一に、分析の手順は説得的ではあっても、到達した分析結果を特殊な概念や用語で表現するときに、より適切なものがあり得たのではないかと思われることである。また、具体例を選択する基準が明瞭に述べられてはおらず、やや恣意的傾向が強いこと、そして、映画の歴史的変遷を捉えるべき通時的配慮に欠けていることも惜しまれる。しかしながら、それは将来の課題として残されたものであって、ここに提示された方法と成果だけでも学界にたいする貢献度が高いと言うことができる。

以上のように、本論文は映画音楽を理論的に分析した研究として従来の研究の水準を越える優れた論考である。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに充分な価値を有するものと認定する。